

スイスで考えたこと

草苺 健

6月の末から10日ほど、スイスを旅行してきた。アルプという高原の牧場が特有の共有地コモンズであると知ったこと、また、近年、森づくりにあたって伐木のチェーンソーテクニックをスイス・オーストリアなどの手法に学んで、その確実な技術体系に目ざめたことなども、スイスを大いに近くしていた。

だがなにより、10代の頃アルピニズムを標榜してのち、アルプスはやはり憧れの的であったことが大きい。そのスイス、表の華やかな観光立国とは裏腹に、国連にもEUにも加盟せず徴兵制度が機能し、いざとなれば訓練された兵士150万人を招集できる。その国益感覚と緊張感は、今の日本と最も遠いモデルでもある。とても気になっていた。

目で見えるスイスの、軌道系と宿泊とガイドシステム、地産地消の観光インフラにはうなってしまう。そして森林地帯から森林限界を超えた一帯のお花畑や、氷河、岩山で繰り上げられるアクティビティ。若い男女が大勢ロッククライミングや氷河をザイルやアイスハンマーをもったアルピニストの出で立ちで出かけていくかと思えば、お花畑にはイキングやマウンテンバイクも大勢いる。田園には、高齢の夫婦が車でやってきて、静かに歩いている。



そしてなにより、スイス観光は「高い山」と眺望である。高い山に身をさらすことと、さらなる高みを仰ぐことは、人のある種の畏れに似た感覚に間違いなく誘われる。そして身を任す。健やかな心身を獲得すると言うことと、これらの行為は因縁がかなり強いとわたしは直感する。表面上はまったく違うように見えるが、北海道でカラフトマスの遡上やヒグマやエゾシカと出会う体験と実は底通する経験ではないのか。そして健やかな心身というのが、土地と結びついていることに気付いた。地方で生きることはプライドである。なぜなら、地方は土地とつながって生きられる、都市の対極だからである。

土地の守り神・産土(うぶすな)とともにあれば、生命の多少短い長いという意味の健康はもはや問題ではない。スイスはそんなことをわたしに考えさせた。

(草苺 健)

注) スイス事情と旅日記は、『気になるスイス、旅人の見たスイス』を参照下さい。

<http://homepage3.nifty.com/hayashi-kokoro/swiss2011.html>